

書評

ホセ・ペイラツ

『スペイン革命におけるCNT』

José Peirats, *La C. N. T. en la Revolución Española, 1932-55*

青 島 茂

昨年はスペイン内戦から三十周年ということで、内戦に関する翻訳書が続々発行された。しかし大抵どの書を見てもスペイン社会運動史におけるアナキストまたはアナルコ・サンジカリストの重要な役割について述べてはいるが、その立場から書かれたものは、リチャーズの「スペイン革命の教えるもの」以外にはとんだないようだ。アナキストの立場で書かれた重要な文献はまだあり、翻訳されないままになっている。たとえばその中で一番資料も豊富で記述の詳しいものにホセ・ペイラツの「スペイン革命におけるCNT」がある。この書はリチャーズの著書の中でしばしば引用されている。

一九一一年CNT（アナルコ・サンジカ

リスト系労働組合）創立に始まって、一九三八年フランコ軍に対する左翼の決定的敗北に至るまでを詳細に扱っており、題名からもわかるようにCNTが中心となっているが、スペインの労働運動ではCNTが主流であることを考えれば、ペイラツのこの書はまたそれ自身スペインの労働運動史でもあるといえよう。原文はスペイン語で書かれている。著者ペイラツについては彼がスペインから亡命したアナキストであること以外に不詳である。全三巻で、各巻およそ四〇〇頁、三巻合わせれば一〇〇〇頁以上の大冊である。次にその構成、記述の方法、内容など簡単に述べることにしよう。

まず第一巻では、冒頭に著者の序文があり、その中でアナキズム（特にアナルコ・

サンジカリズム）がどのようにしてスペイン社会に根づいていったかを概説している。本文は著者自身の書いた叙述の他に、それが著者の独断によるものではないことを示すため、場合によっては数頁にわたる長い引用（そのほとんどが当時発行されていた新聞、雑誌、速記録等からのもの）を行なっている。ペイラツの筆は非常に明快であって、僕のようにスペイン語についてはあまり造詣の深くないものにとってもよくわかるが、引用箇所の中には、スラング（方言）ともとれるような辞書にもない単語または句がしばしば出て来て理解に苦しむことがある。このような大冊にもかかわらず、事実の少からぬ省略または短縮がおこなわれており、もし細大もろさず書いたとしたら、少くともこの三倍ぐらいになるのではないかと思う。

第一巻の本文は、一九一一年九月バルセロナの美術館で非合法のうちに設立されたCNT（Confederación Nacional del Trabajo 全国労働連合）結成大会に始まる。当時の記録は烈しい弾圧のため殆んど残っていないが、明確にわかっていることは、この労働組合連合体がその基本路線と

してアナルコ・サンジカリズムを採用したということである。CNT誕生以前の思想的背景については記述を省略している。当時は各地で大規模なストライキがおこなわれていたが、それに対する弾圧も烈しく、残忍な、また卑劣な白色テロが続き、多数の優れた闘士が殺され、投獄された。その具体例の幾つかが引用されている。一九一七年のロシア革命はCNTの内部に重大な影響を及ぼすが、結局、一部をのぞいては全支部がボリシエビズムに反対し第一インターナショナルの基本線を固守。やがてプリモ・デ・リベラの独裁時代が終りに近づき、共和制の可能性が出て来ると、CNT内部にも改良主義の兆候が現われ、政治運動との結びつきを主張するペイロとあくまで反政治主義をとるベスタニャとの間に激しい論争が展開される。

第一次共和制が実現されても労働運動は依然として弾圧を受けつづける。一九三三年再び右翼による暗黒政治がおとずれるが、「政治犯の釈放」を実現するため今まで棄権主義をとってきたCNTがその原則を一時放棄したことがあずかつて、一九三六年第二次共和制が実現する。これについ

ては海外からも批判の声があり、AIT(国際労働者協会)アナルコ・サンジカリスト系インターナショナル)も「選挙と最小悪の危険」と題する声明書を発表して、スペイン労働者に警告を発した。第二次共和制の下でもやはり労働運動に対する抑圧が続く。一九三六年サラゴサの大会で一時分裂した反主流派(原則派)が復帰し、UGT(社会党系労働組合)との同盟が討議され、この大会で始めて公けに「自由共產主義(Comunismo Libertario)」が宣言され、特に革命後の社会建設をどう進めるかがかなり具体的に論じられた。同年七月將軍たちがかねての計画通りに反乱を開始した。その時の共和政府のお偉方が、右翼の反乱目的が労働者弾圧にあることを知っていたので、手を拱いていた事情が述べられている。それは反乱の報に接したキロガ首相の言葉「軍部が起きるなら、わしは寝ることにしてしよう。」に端的にうかがわれる。軍部の反乱を事前に察知して警戒していた各地CNTの労働者は直ちに防衛措置をとり、兵營を襲撃、各所で反乱を挫折させた。武器の欠乏が訴えられ、その確保のためという名目の下に共和党、社会党、共産党など

の結成したいわゆる人民戦線にCNTの代表が参加するようになる。その結果、CNTは人民戦線政府の「規律」を押しつけられ、自らの首を締めあげてゆくことになる。「戦争と革命の板ばさみ」「カタルニャ政府内のCNT」「共和国政府内のCNT」「政治と革命」「政府内の協同の結果」等の章でその詳しいいきさつが述べられている。

だがその一方、特に各地のCNT労働者が中心となって革命事業が押し進められ、広範な地域にわたって「集産化 Colectivización」がおこなわれ、特に、アラゴンやカタルニャのようにCNTの勢力の強いところでは、数多くの「集産体 Colectivos」(民衆自身の自発的建設による地域的な生産消費組織)が生まれた。第一巻の四分の一がこの集産化の詳細な報告にあてられている。しかしこれでもなおすべてが語りつくされている訳ではない。この集産化を扱った第十五章は全三巻を通じて最も光り輝く部分であるといえよう。アナキズムを単なるユートピア思想として一笑に付する者も、ファシズムとの闘いをおろそかにしてユートピア建設に夢中になりすぎ

たといつてアナキストを非難する者も、各地の「集産体」の事実を知れば、アナキズムが決して現実を忘れたユートピア思想ではないということ、農民による土地の集産化、労働者による工場の社会化は、むしろスペインの現実においては反ファシスト斗争にとって欠くことのできない民衆の組織化と経済的基盤の確立に役立つものであるということ、革命の同時的実現のみが労働者および農民に何のために闘っているかを明確に教えてくれるのだということ、等を理解するだろう。実際、労働者や農民が自分達の運動を弾圧してきたブルジョア共和国のために命を的にして闘ったと考えることはとどろばかたものではない。しかし共産党は当面の戦術として採用したブルジョア民主主義擁護のため、アナキストの集産主義革命には真向から反対し、政権を握るとただちにその弾圧にとりかかった。したがって多くの集産体がファシストの軍隊と共産党の軍隊の両方からの攻撃を受けた。しかしそれらはペイラツの叙述によれば、破壊されてもまたすぐ建設された。

第二巻は、スペインをとりまく世界状況から始まる。イギリスとフランスはスベ

ンにある自分たちの資本をおびやかされるのを恐れて不干渉政策をとった。フランス人民戦線内閣の無能は、ドイツ、イタリアのファシズム勢力に大きな利益を与えた。フランスでもスペインでも人民戦線はそのブルジョア的またはブルジョア的の性格の故に革命的労働者との間に絶えず摩擦を起さざるを得ない。国内では労働者民兵軍を解体して、人民軍の名の下に正規軍の統率下に置こうとする。正規軍はソ連からの武器援助のおかげで急速に勢力を増した共産党の手にある。以前の共産党勢力は微々たるものだったが、社会党と合同し「統一社会党」(PSUC)を形成してから、にわかには伸びを示した。出しぬげにCNT全国委員会と共産党中央委員会の和解が宣言される。またCNTとUGTが同盟する。この時にはUGTはすでに労働者ばかりでなく、その中に商店主、中小企業工場主などのプチブルジョアまで組合員として入っていた。アナキスト指導者たちが、UGTや共産党とのイデオロギーを超えた団結の幻想にうつつを抜かしているうちに、スターリン主義者の陰謀は着々と進む。反ファシズムの同志たちを彼らが反スターリン主義

者だという理由で秘密監獄にぶちこんだ事実が発覚する。POUM(マルクス主義労働者統一党)反スターリン的共産主義者の党)に対して戦線を撓乱するトロツキストとして弾圧がおこなわれる。やがて有名なバルセロナの「五月の悲劇週間」が生じる。共産党によるCNT攻撃が公然と開始される。民兵軍の最後のとりでであったアラゴン評議会が一片の法律によって解放される。アラゴン地方の集産体は共産系軍隊の手で破壊される。PSUC(統一社会党)から元UGT書記長だったラルゴ・カバリエロを追い出すことによって共産党はPSUCを完全にその手中に握る。このスターリン派の一貫した策動は、第十八章と第二十章から第二十六章まで刻明に書かれている。

第三巻。カタルニャではCNTの力はまだ健在であり、経済的再編成をおこなっているが、そこにも国家による干渉の手が伸び始めた。CNT労働者によって社会化されていた重要産業が次第に国有化に移され、共産党の支配にゆだねられるようになる。アナキスト勢力の強いアラゴン戦線は武器なしに放棄され、全面的な敗北をよぎ

なくされる。反ファシスト陣営でのヘゲモニーはアナキストの手から共産党の手に完全に移る。共産党の支配下にあえぐアナキスト陣営内の苦悩から、現状を耐え忍ぼうとする派と抵抗派との深刻な対立が生じる。戦線および銃後における共産党SIM（軍事調査部）の残忍なテロにより、P O U MやCNTの指導者が次々と消されてゆく。もはや反ファシズムの根城であるカタルニャもファシスト軍に踏みこじられるようになった。共和国側には武器弾薬も底をつき、ただ手を拱いて殺されるばかりである。最後の一兵まで斗わせようと背後から銃をつきつける共産党と、もう共和国軍の敗北は時間の問題にすぎないとして出来るだけ多くの反ファシスト斗士を外国に亡命させる時間をかせぐため敵と取引しようとする反共産党派との間に同士討ちが行なわれる。そして遂に共和国軍はフランコの軍隊の前に無条件降伏する。

この書の最後は次のような文句で終わっている。「いつわりの謙遜からではなく、尊敬によって、我々は後世の歴史家に、いつか直接の目撃者の資格で、かのスペインの悲劇のすさまじいエピソードを記述する役

目をゆずることにしよう。無数の打ちくだかれた希望がアリカンテの港に象徴されるあの悲劇の……」

もし可能ならばこの著書の中でCNT指導者たちの個人的な人物像を紹介して欲しかったと思う。ドゥルティイについては若干の描写がある。オリベル、モンツェニ、アスカソ、メラ等については、その断片的な政治的言動が記されているにすぎない点で物足りない。特にドゥルティイやアスカソについては、H・トーマスの著書でも、ブレナンの著書でも、右翼のピストレロ（殺し屋）に対する左翼のピストレロの群の中から現われた勇敢ではあるが残忍な男として描かれているので、彼らの生い立ちについてのある程度詳しい説明が欲しかった。

ともあれ、事実のすべてを語ることは困難にちがいない。トーマスの「スペイン市民戦争」が、いわゆる政治評論家や軍事評論家がよくやるように、ただ次々と起る政治的、軍事的諸事件を表面的に追ってゆくだけでその底にうごめく民衆の苦悩や努力について殆んど何も語っていないのに対して、ホセ・ペイラツの「スペイン革命にお

けるCNT」は、トーマスの著書ほどには充分整理されていないが、スペイン社会を動かしてきた主要勢力である、労働組合の活動を描くことによって、諸事件を表面からではなく、奥底から見透すことを可能にしてくれる。

直接購読のすすめ

「黒の手帖」は定期刊行の雑誌ではない。本当に書きたいものが書かれた時に刊行される、文字通りの不定期刊行物である。また、早稲田文獻堂、神田ウニタ書店、川崎甘露書房、京都三月書房、大阪曽根崎書房などごく少数の書店を除いては、市販に出さず、広告もほとんどしない。だから、「黒の手帖」を確実に手に入れるには、直接購読者となるのが最も安全であり、有利であり、便利でもある。直接こちらから郵送するのだから。住所不定、または下宿転々癖以外の人達にはぜひ直接購読者になってほしい。

スペイン革命におけるCNT (1)

ホセ・ペイラツ

今村五月記

初版への序

一九三六年以来、スペイン内戦とフランコ体制に関する多くの書物が発表された。勝ったファランヘ主義の要請によって書かれたものを除いて、敗者に組する側からの刊行物に限っても、これらの書物の大方は根本的な欠陥を免れていない。すなわち、CNTとそのスペイン革命における役割をめぐって省略ないしは悪意の沈黙があることである。限られた著者だけが、イベリアの社会生活のこの重要な部分に敢えて純粹の誠意を示した。

革命の進行につれて連合の組織が果たした役割を明らかにすることが本書の第一の使命である。この目的のために我々は、我々の客観的な能力を全て試みた。どの程度立派にできたかを判断するのは読者の責任である。我々の責任に帰せられる部分については、審判者、当事者としての我々の資格に危惧を抱いている。全面的に読者の御海容を乞う。

仕事の全体的な計画では、紙面の都合により、さらに用語を事実

とテキストに合わせようとする希望により、解説の部分省略することに努めた。このことと、テキストの信憑性については、確実を期するために、美的趣味から望まれるような場合でも文体を統一しないでそのまま載せた。

第一巻にはCNTが登場する一九一一年から一九三六年までの、諸事件の綿密な報告を入れた。資料の全分野を網羅するのは困難なことだが、重要な点は決して抜けていないと信じる。

我々は第二巻を刊行しようというささやかな望みをもっている。そこでは、常にCNTの活動との関連において、この第一巻の最後の日付に続く諸事件とスペイン内戦の軍事的終結に触れるつもりである。

我々を激励してくれた人々の好意と力と適時に大いに助けられた。

スペインの危機は、かつて一民族を激しく動揺させた最も深刻な危機の一つである。国家と民衆の精神との間で戦われた不断の闘争

が数世紀に及ぶことからも推量されよう。国家はスペインにおいて二度まで中央集権的であった。中央集権主義は——国家には自生的なものであって——、半島の地理上の中心、広大なカステイリヤ地方、封建的軍事的絶対主義の地に、その伸張の基盤をもっている。

中央高原の地理的一元性の反映であるところの精神的一元性に対応して、半島の周辺は、山脈や、平野や溪谷でもって、姿や言葉や伝統の無限の多様性の原因である分断線を形成している。この千切れた風景のおおの地方あるいは曲折は、制度の執拗さと自由の誇りと最高の実体を示している。

ここにイベリアの連合主義の揺籃がある。この地勢こそ、境を接して隣りあう自治体制、ときには分離主義の温床であり、しかも後者は絶対主義への反立なのである。独自の個性と文化をもつ国民への中央政府の法外な要求は、国民をしてしばしば分離主義的解決へと押しやった。このような場合、分離主義はすでにその歴史の初声以来、自由の精神の逸脱というより、我々スペイン人の激烈な個人主義に並行するものであった。

絶対主義と分離主義の間に——統領的専断主義と個人主義の間にと同様——連合主義が頭をもたげる。これは、——きわめて社会的な事実である——個人的なものから、自由都市を経て、生まれた土地ないしはその近隣のようなあらゆる自治体の、自由で自生的な絆に基づいている。

スペインである種の外来思想の影響がもつ焼き尽すような熱気は、土着の連合主義が——何世紀もの圧迫のためにほとんど穩健になつてはいるが——存在することを、否定するどころか肯定するものである。連合主義はスペインでは泥の上に降った。ヴァレンシア

の同業者組合（ゲルマニア）や例のカステイリヤ統一戦争のような地方的な運動を除けば、その最も特徴的な現われは労働者の組合社会にある。

前世紀後半、世界には労働者の第一インターナショナルという大事件が起きた。その刺激となつたのは、ブルードンに指導されたフランス、ベルギー、スイスの労働者たちであった。政治的連合主義は、ピ・イ・マルガルの筆によってスペインに紹介された。バクーニンの密使らはスペイン労働者階級に自由アナキズムの種を播いた。ピ・イ・マルガルの連合主義は、共和党の利益のためよりも労働者階級の目的に奉仕した。連合主義は、政治的には成長したけれども、一八七三年の政権以来、最終的には信用を失墜するしかなかった。労働者階級はその幻滅から、復興する支配者への幻想を捨てなければならぬという実り豊かな収穫をあげたのであった。

我々は、スペインでの歴史の出発点から、政治的指導者やその党からは独立した民衆の行動の再生に参加した。分離主義や絶対主義の病から癒え、国境と人種の偏見と宗教的虚偽を廃絶することを誇りとして。

率直に言つて、スペインはヨーロッパの主要な国々やアメリカより一世紀半遅れた時代を生きていた。何とかしてお互いを区別するために、政治的諸党派が保守主義者と自由主義者自身の間で資格を得ていたが、そのことはプロモンシアメントの有様について国民に弁解するものではなかった。労働者階級だけが、その時代の先頭に立っていることを知っていた。インターナショナルのスペイン支部は、ほとんどその最初から、——カタロニア、東部、アラゴン、

中央、アンダルシア、その他の——成長する連盟を代表して、世界会議に参加した。そして、資本主義と、挑発的なゼネストと生産手段の社会化との不可避の対立に関するあの有名な論争に加わった。

戦いは始まっていた。新しい要素、プロレタリアートは、スペインで悪化していくあらゆる事態に明白な衝撃を加えようと競技場に臨んだ。急進派といえども意図しなかったようなこと、国を文化的にたおくれと悲慘とから立ち上らせること、宗教的、領土的、軍人的カシズムから解放すること、それを、明らかに最も遅れた階級が決意したのである。スペインのインターナショナルリストたちの声明は、はかりしれぬイデオロギーの豊かさをもっている。それらの声明は、ストライキが時勢の枠内にあるということが高く評価して、時代に抗して戦った。革なめし職人や旋盤工や印刷工や織工たちが、誇りをもってそれらに署名した。彼らの間で国家社会の解剖がなされ、その起源の不正と矛盾が摘発され、人間による人間の搾取と、世界を私掠免許証を帯びた海賊船の荒らす海にした、「自由競争」の法則とが弾劾された。この決定的批判こそは、とりもなおさず、イベリア流連合主義の中における熱心かつ真実な社会主義理論の輝かしいページへの第一歩であった。

スペインの労働者階級によって発展させられた力と獲得された不安定な結果との間に、ある不均衡を指摘することは可能であろう。しかし、いかなる批判をも超えて、有効性への最も強い要求をしりぞけたものは、高潔な理想と名譽との本質であり、スペインのアナキストの戦闘的犠牲的精神であった。労働者の完全な解放への直線を進もうとしたことは、彼らの組織の上に血なまぐさい弾圧の嵐

を呼ぶことになった。インターナショナル自体の推移に従って議会では（ガリド、ピ・イ・マルガル、カステラルその他のインターナショナルに関する演説を参照のこと）その組織の非合法化と活動家に対する弾圧とが続いた。

無政府主義的労働運動がスペインの政治的社会的生活のために表明したものは、その直接の効果だけでは測りえない。インターナショナル当時の「スペイン地方連合」（弾圧後の）「労働者の団結」という総称をもつ統一組織、そして最後に、「全国労働連合（CNT）」のような結社あるいは組合形態の下で、アナルコサンディカリストの運動はこの八〇年間にスペインの政治的社会的な雰囲気、真の誘導力を発揮するようになった。しかし、それだけではなかったと考えるならば大変な誤りである。

アナルコサンディカリズムは、科学的、芸術的、哲学的、教育的、折衷主義的な宣伝と常にいっしょであった。それは半島で創出された最も興味深い教育運動の一つ、フランシスコ・フェレル・ガリディアの殉教を栄光とする近代派あるいは合理派の生みの親とされるべきである。

この運動は、多くの中傷家の言に反し、煽情的な解放感といったものとはほど遠いものである。その衝動性を利用できたとしても、運動が表明しているものの価値を無にすることはできない。行き過ぎは新思潮にはつきものであり、革新と伝統とのコントラスト自体の直接的な道理において強調されるのが常である。そして、これについて言うなら、革命的な不穩状態の中に生まれたプロレタリアと、旧慣を墨守するスペイン国家との間の衝突が強ければ強いだけ、唯物論的実証主義の流れを汲む近代教育の概念と、聖職者や修道士に独

占された公教育との間の軋轢も強かったのである。

近代派とともに、そして、あのように悲劇的に失敗した教育事業に合せて、労働者の間には前世紀の諸発見の果実、スペインでは禁じられていた真の果実が普及していった。

スペイン労働者の運動のもう一つの特性は、イベリア民族の気質にとって決して外的なものでなかったアナーキズム以外は、全ての外的影響から独立していたことである。ここで、バクーニンの密使の理論的アナーキズムが我々スペイン民族の特性の中に信用における土地を見出したということを繰り返そう。

断固戦うという主義に加えて、アナーキズムは社会哲学的概念を表明している。人間にとって自然な自由への傾向（あらゆる社会主義思潮に共通の概念である）から離れて、アナーキズムは、目的と手段の間の矛盾を免れうる唯一の思想であった。この矛盾を、アナーキズムは、自由の概念とあらゆる形態の権力との間に暴露したのである。

この矛盾の解決は権力そのものの起源の廃棄にある。権力そのものが、自己以上のものを我々に要求する権力に他ならぬ。権力は、自由の単純明快な否定であり、確実な解決とはなりえない。それどころか、権力は自由の本質的かつ最も残忍な敵なのである。

アナーキズムが暴露したもう一つのことは、一時的解決としての権力という奇弁である。手段としての権力は常に宿命的に腐敗する。権力的手段は一時的ではありえない。ここに、政治的あるいは革命的なあらゆる経験が我々を教えるのである。それらは根底に軍隊があった。ここから、アナーキズムの政治権力掌握と上からの自

由の賦課とに対する必然的な対立が生じる。

アナーキズムの最も重要な闘争の一つは、マルクシズムからの脱出であった。それは第一インターナショナルの内部、マルクスとバクーニンの相互の党派の間で始まった。世界における政治的社会主义の退廃とソヴィエトの出現は、アナーキズムのために実質的問題を解決した。フランス社会党大会（一九四五年）でのレオン・ブルムの告白はこう結論した。「社会主義には二つの道しか残されていない。資本主義の野蛮かつ専断な管理人であり続けるか、バクーニンの戦術に戻るか、である。」

スペインに関して言えば、労働運動が無政府主義になる過程で二つの方向を採らなければならない。スペイン人気質の無政府性と、国政の根深い現世欲の産物たる民衆の不満とである。CNTは、いわゆる選挙闘争と議会闘争の完全な放棄及びあらゆる政党からの独立という原則をかけた。そのことは、国の運命において決定的目的を放棄するという事にはならない。

全く逆である。労働者階級は、いつもいわゆる純粋な（無意味な）組合主義による分散を示していた。ここから、戦術と原則と目的との採用及び「目的のための」宣言が出た。CNTは、この戦闘的アナーキズムの原則と戦術と目的とを自分のものとした。それはCNTを肥沃にし、着実に導いていった。

CNTの目的とは、直接的な諸要求のため、資本主義及び国家の革命的破壊のために、すべての被搾取者を結集することである。その至上目的は、自由自治体（市会）、地域的、地方的全国的連合に基づいた社会体制であるところの無政府共産主義である。

組織の連合主義については、単なる願望や目的ではなく、やはりCNTの組織的活動的構造である。ある理論家たちが、組合が活動している形態そのものの中にすでに存在していると考えたがった極端さを、将来の社会の機能に採用することに決めたのである。

その機能は次のようなものである。組合は、通常及び臨時の全国大会で採択される一般的な性質の決議の他には連合体との結びつきをもたない自治体を作る。しかし、この協定以外には、組合と、組合の独自の技術部門にいたるまで、組織的統一の損傷とならぬ限りいかなる決定をしようと自由である。この原則は厳しく、連合の指導性を直接指示調整するのは組合であるときと断言できる。

地域的、地方的、全国的な決議の母体は、常に組合の総会である。総会では、加盟者はすべて出席し、提案し、討論し、投票することが出来る。決議は、比例投票によって補正された多数決の原則に従って採択される。

臨時大会は、集った組合の指示によって進められる。会議は議題まで指示するが、その中で日程が討論され、総意の代表者、代議員が任命される。この連合の機能は上から下まで、代議員会における権力的腐敗の可能性に対する予防を期している。

CNTの闘争戦術は革命的組合主義に独特のもの、すなわち「直接行動」である。この戦術は一方では資本主義（あるいは国家）と組合との闘争で、公約またはすべての仲裁を拒絶することを要求し、一方では選挙闘争及び議会闘争の完全な放棄を要求する。

その戦術は、独自の原則と目的をもつアナールコサンディカリズムから演繹される。次にそれをみてみよう。

CNTは、資本主義と国家に対して戦う。CNTによれば、国家は本質的に抑圧と腐敗と特権の機関である。抑圧的、実力的、警察的な手段と切り離せない権力の中央機関が国家であると考えられる。国家は、そして資本主義はそれの外的経済的形態にすぎないのだから、社会発展の第一の敵である。アナールコサンディカリズムは、国家を自由主義と両立できぬものとみなす。国家はリベラルではありえない、むしろ、それが代表する伝統的特権とヒエラルキーとが尊重される限りにおいて存在する。国家の民主的変更が偽装とみなされることはいうまでもなからう。国家にとって、デモクラシーとは情況によって強制された必要にすぎず、階級と絶対的権力と不可侵の権威の利益のために邪魔を入れないでよりよく奉仕するために握っている有効な手段にすぎない。国家は常に階級的偽善に従順である。

直接闘争の原則からの逸脱はすべて妥協として、つまり階級闘争の原則の否定として解される。議会主義は、腐敗とデマゴギーの党派を代表するのは別に、運命的にあるいは巧みに国家の征服あるいは国家との協力に向かう。国家の征服は常に幻想である。国家は最後にはその征服者たちをすべて征服する。国家に近づくものを援助もしくは攻撃によって国家に変える。

連合の直接行動とは闘争の永続的な実践を意味する。その一方、組合による経済管理すなわち無政府主義的共産主義への第一歩を進める断固たる反国家的暴動に目を向けつつ、労働者が技術的、道徳的、文化的、組織的に準備を整えることを意味する。

又、政治組織に対する嫌悪感を、どうする事も出来ない。こうして、末端権力への憎悪感、又、権力組織への嫌悪感は、政治好きの反面を押し込み、抵抗の場面に押しやるのである。この抵抗行為への強力な執念は、反面、政治支配行為への、関心の度合の強さを物語っているといえる。

現代思想と現代科学の繋り、現代政治と現代科学の繋りの発見についての努力は、割合に等閑視されている。サルトル等、実存主義の哲学に一步足を踏み入れたものの、思想、政治との関連については、存在の関連を避けて、論理へ逆戻りし、その関連を断ってしまった。すなわち、彼は、流動的関連の中へ足を踏み入れたにも拘わらず、彼の政治的、思想的活動場面においては、その固定的関連の論理に隷属して行動している。訪日の時のあの御説教は、サルトルのイメージをすっかり壊してしまった。文化大革命における中国と同様に、矢張り彼も、共産主義者でしかなかった。現代政治の存在性と、現代科学の存在性の繋りの求め。これこそ、我々現代人の誇りとする仕事であると考えられる。この簡単な事に気付かないのは、学者、思想家、哲学者、文化人等と称する、学問の奴隷である所の人種だけであって、庶民的感情は、すでにそれに気付き、豊かな生活の中より引き出しつつあるのである。

(四一ページよりつづく)

現下の経済面においては、CNTは階級闘争を採用し、ブルジョアジーとの戦いには、紛争中の当事者に対する部外者の力はいかなるものも介入を許さない。いかなる仲裁も妥協とみなされる。妥協は協力の原則である。資本家と労働者の利害は妥協しえない。しか

も多くの場合がそうであるように、国家が仲裁者であるときには問題が複雑になるのはいうまでもない。

すでに、資本主義及び国家との協力は、美しいが苦い果実を実らせた。果実とは、いうところの改良主義、すなわち外観だけの改良、永遠の約束、引き延ばし、まやかしかである。社会主義と政治的サンディカリズムの改良主義的の工作を経験したことは、アナルコサンディカリズムにとって決定的だった。前述のレオン・ブルムの言葉の中で、社会主義と政治的サンディカリズムはみずからの傷口で呼吸している。

政治的改良主義は、資本主義国家と国家資本主義にとって長寿の仙薬であった。労働者を思想的に去勢し、政治的社会主義を不毛にし、組合主義を家畜化する原因であった。

以下、本書を刊行することによって、我々は、スペイン革命にいかにかCNTが参加したか、CNTそのものがいかなるものであったか、その栄光と幻想と犠牲と欠陥と誤謬とが何であったかを公にしたい。

この第一巻は、革命と社会の問題に携わるすべての研究者、CNTについてこの三つの記号の文字しか知らない人々、アニドとアルレギの時代に、プリモ・デ・リヴェラの独裁の時代に、共和国の治安警備隊の統の前に、一九三六年七月一九日に、内戦に、追放に、フランコ体制へのレジスタンスに、国家の弾圧の下で倒れていった我々のすべてに献げる。我々の意志を力づけ、情報や記録集めを助けてくれたすべての友人と共鳴者に献げる。そして最後に、新しい社会への出発に際し、我々を支援するために召集されたアナーキストの若き世代に献げる。